河野淳子先生へのインタヴュー

英語英米文学合同研究室院生

合研：近年，留学生の傾向・性格が変わってきていると言われています。かつて日本が鎖国を解いて，先進国に向けて多くの留学生を送った時代は，国運を背負い御家再興を願って，官費を使用してのものが主流でした。その例が，森鴎外であり，夏目漱石でした。双方，医学・文学と専門を異にし，言語もドイツ語・英語とレンジを広げていましたが，先の特徴は同じです。これは，後に津田塾を開く津田梅子などの女子留学生にも言えることでした。その一方では，御木本隆三のようにロンドンで東洋の真珠を売って日本へ外貨をもたらすと言う殖産興業の一翼を担いながら，そのビジネスを蔑ろにして芸術批評家・社会改良家のジョン・ラスキンに私淑し，彼の作品・原稿を買い求めて幾度か禁治産者の指定を受けたビジネスマンもいました。その為，現在に至ってもラスキン研究は日本を無視する事が難しいとも言われています。いうならば，これ等は初期の私費留学生の代表ともいえましょう。公費私費の別無く出費と言う大変な犠牲を払って自らの属する社会の為に留学したと言うパターンを見る事ができます。しかもその背後には外国語・異文化・技術を学ぶ重要性が控えており，文学者は正にこうした大勢の中心にいたわけです。その結果として，ただ外国語ができる以上の知識を要求され，また自らもそれらを貪欲に吸収しました。

これに反して，今や良くも悪くも日本円は1ドル100円を切ることもあるまでになりました。又，生活レベル・様式は欧米に追いつこうとするどころか，スシ・フトンが英語語彙に入り，パーティでも無い限り，玄関口で室内履きに取り替えてカーペットを保護しようと言う家庭も出てきてい

ます。そうしたグローバル化の波によって，英語は義務教育の中だけでなく，社会人としてのマストの一つにもなりつつあります。こうした中で，英語の習得度の差に大きな隔たりが観察される一方，短期長期にかかわらず，英語圏への留学は学生院生にとっての必須の体験となってきています。その結果，私費留学生が増え，時には遊学とまで呼ばれるほどですが，先の御木本隆三の例をみれば，遊学と呼ばれるものにも成果が見込まれる事が分かります。

こうした新たな傾向の中で，ことに我々が属する英語英米文学研究の分野では，単なる留学でなく，学位取得の為の留学などが出てきています。日本が経済力を増したために，海外で奨学金を得る事が他国からの留学生よりも難しい場合もあり，日本での文学・語学者の劣勢に比すると，留学は親から独立している筈の院生にとって困難であることは変わりないともいえましょう。こうしたことを踏まえて，外国で学位を取得した河野先生の体験を伺いたいと思います。どうぞ，宜しくお願いします。

Q1：先生の現在の専門は何ですか？　専門外の人間の為にも，少し詳しく教えてください。

語用論が専門ですが，その中の pragmatic impairment が現在の研究テーマです。具体的には認知症高齢者のコミュニケーションの喪失について研究をすすめています。

Q2：学部まではどんな勉強をしていましたか？　どんな勉強法をとっていましたか？　サークルに所属していましたか？　趣味は何ですか？

学部時代はじつは全く勉強をしない学生でした。４年で何とか卒業はしましたが。

アメリカ文化研究会というサークルに所属し，なぜだかそこのメンバーとテニス，スキー三昧の日々でした。

Q3：何時，どのようにして留学を決心しましたか？　留学先はどちらの国でしたか？

大学を卒業し，企業に就職し，結婚をした後に，夫が海外（英国）に行くことになり，留学することを決めました。それゆえ，米国・豪州などの選択肢はありませんでした。

学部では独語学独文学科専攻でしたので，留学する前の年に龍大の大学院英語英米文学科で1年学び，先生がたからいろいろなアドヴァイスをいただきました。

Q4：その頃，どれほどの英語力がありましたか？　どのような英語力かも教えてください。

初めてIELTSを受けた時のスコアは5.5でした。IELTSはブリティッシュカウンシルが行っている試験でreading/ listening/ speaking/ writingの4領域から成り，総合スコアとともに各領域のスコアの判定も出るため，自分の弱い領域，強い領域がよくわかるという長所があります。当時英国では大学院入学の際に，ほとんどの学部で入学の基準をIELTS 5.5以上と定めていましたが，残念ながら（応用）言語学専攻の場合は7.0以上必要ということもあり，その基準をクリアするのに苦労しました。

特にwritingが他のスコアの足をひっぱっており，書くことに重点を置いて勉強をしました。実際にコースが始まって，頻繁にエッセー等の課題が出されると，このwriting力がいかに重要かということが身にしみてわかりました。

Q5：留学先（国・大学・専攻）を選ぶ上でのポイントは何でしたか？どんな苦労がありましたか？

じつは私の場合あまり選択肢はなく，夫の赴任先から通える大学ということで，シェフィールド大学かシェフィールドハラム大学（旧ポリテクニーク）の2校に的を絞っていました。専攻は言語学部にあるコースのいずれかと決めていたのですが，TESOL の qualification をシェフィールド大学で取得したので，そのままシェフィールド大学の言語学部の応用言語学の修士課程にすすみました。

Q6：留学ではどこで，どんな学位をとりましたか？

MA in Applied Linguistics, Sheffield University です。

Q7：Ph.D. の研究テーマは何でしたか？

認知症高齢者の心の理論と語用論的解釈というのがテーマでした。

Q8：それを選んだ理由は何ですか？

応用言語学修士号を取得した後は，第2言語習得の研究をしていましたが，第2言語話者の発話は誤用が多くても理解可能な場合があるのはなぜかと考えていました。

それに対して，認知症高齢者の発話は誤用がないのに理解不可能なことが多いのはなぜなのか。これが博士論文の出発点でした。

Q9：将来のテーマは何ですか？ライフ・ワークになるものはありますか？

高齢化社会ではなく，すでに高齢社会に突入した日本の認知症高齢者の数は2005年時点で約169万人，この数は今後急速に増え続けると予測されています。

研究の過程で多くの高齢者介護に携わる方がたとお話をさせていただく機会がありますが，現場の人たちは「高齢者介護とは認知症の高齢者を介護することである」という意識でおられます。また研究は医師，管理栄養士の方がたと共同ですすめられてきましたが，私の関わる言語・コミュニケーションの分野は，実際のケアに携わる方がたより，介護の質の向上につながるとのご意見をいただきました。

ライフ・ワークとしては，この高齢先進国から世界に向けて日本の研究について発信してゆきたいと考えています。昨年末にタイのチュラロンコン大学にお招きいただいて，現在の研究について発表をいたしました。その時に言われたのが，タイでの認知症に関する研究は，医療の面ではあまり変わらないと思っていたが，このような研究が存在すること自体我々は日本から20年の遅れをとっていると。

しかしその反面，私がタイで感じたことは人々の高齢者介護の考え方に仏教の思想が深く関わっていて，それがうまく機能しているということ。英国の介護施設を訪問した際にも感じたことですが，宗教と高齢者介護の関わりはじつは切り離して考えることができないということです。

近い将来のテーマとしては，老年学先進国の英国で介護の質について研究したいと考えています。特に移民を多く抱える英国では，介護をする側とされる側の母語が異なるという問題も生じています。そのような言語コミュニケーションの問題がやはり気になります。

「アラフォー」と呼ばれる歳になって，「老い」というものが他人事ではなくなってきました。単に長生きができる社会ではなく，より良く生きら

れる社会になればいいですね。

Q 10：留学先でと日本での研究方法と指導法に違いはありますか？　どのようなものですか？

研究方法に関しては，日本語で研究ができる環境か否かということで違いは大きいと思います。指導法については，英国の大学にはチュートリアル制度があったので，日本とは少し違ったかも知れませんが，あまり違いを気にしたことはなかったです。

Q 11：留学先で，オフタイムには何をしていらっしゃいましたか？　今はどうですか？

もっぱら週末はホームパーティを開いたり，どこかのお宅へ招かれたり。おかげで各国のお料理やお酒には詳しくなりました。長期休暇が取れる際には旅行をしていました。特に印象に残っているのはエジプトへの旅行です。アブシンベル宮殿にはもう一度，（今度は子どもを連れて）行きたいです。

現在は，子どもと遊ぶのが至福の時です。子どものお友だちと話すのも楽しいですよ。好きな女の子の名前とか内緒で教えてもらったりもします。関西の男子はやっぱり面白いですね。

Q 12：研究の成果は社会の役に立っていますか？　かつて，文学は社会に即役に立たない，時には反社会的であることを誇りに思っていましたが，先生の場合はいかがですか？

研究をすすめる際に，社会に役立つかどうかあまり意識はしたことはあ

りませんが，自分がやりたいと思ってすすめてきたテーマの研究が結果として社会の役に立つということはあるのかも知れませんね。でも役立つ，役立たないに関わらず，みなさんには自分の興味があることをテーマとして研究をすすめていってほしいですね。

Q 13 : 留学先ではどちらにお住まいでしたか？それはどのようなところですか？　生活一般についてお教えいただければ，有難いのですが。

はじめは大学の寮に住んで，その間にフラットを探しそこに移りました。円高の影響で生活にゆとりが出たのをきっかけに，最後は一軒家に引っ越しました。丘の上にある眺望の素晴らしい家で，庭にはりんごの木がありました。

地下室があってそこには大型の冷蔵庫を置いていたのですが，冬場はビールなどの飲み物を冷蔵庫に入れておかないと凍ってしまうので，冷蔵庫は保温庫の役割も果たしていました。

生活一般は為替レートに左右されることが多いですね。滞在中 1 ポンドが 250 円から 135 円まで変動し，1 ポンド 150 円前後の頃 5000 ポンドで買った中古車が，帰国時には約 3000 ポンドで売れましたが，その時のレートが 1 ポンド 250 円。とても複雑な気持ちになりました。

Q 13 : 留学費用やその内容についてお教えください。また，奨学金をお使いになりましたか？

ご存知の方も多いかと思いますが，英国の大学の授業料には 3 種類 (local/ EU/ overseas) あり，日本人は overseas に該当します。当時の制度では年間 5500 ポンドだった overseas 向けの授業料が，EU からの学生だと約 2000 ポンド，ローカルの学生は 1000 ポンドというようにかなり差

がありました。学生ビザで入国する人はフルタイムの学生にしかなれませんが，私はビザの関係で，パートタイムで修士課程に入りました。パートタイムは働きながら学ぶローカルの人たち向けの制度で，通常1年の修士課程を2年間で修了することになるのですが，授業料は年間約800ポンドですみます。しかし，この制度には英国政府からの補助金が投入されているので，パートタイムの学生が単位を落とすことを大学側はすごく嫌い，指導教授からはしょっちゅうお尻を叩かれていました。奨学金という形ではありませんが，このような制度で勉強させていただけたことにとても感謝しています。

Q 14：私費留学をどの様に考えられますか？

留学したい大学に交換協定があるとは限りません。その場合私費で行くのもひとつの留学のかたちだと思います。

Q 15:近来年少児の留学が短期・長期にかかわらず盛んですが，賛成でしょうか？

どうでしょう？臨界期説の年齢の要因などを考慮すると，言語習得に関して音声面でのメリットは否定できないのかもしれませんが，２１世紀はworld Englishesの時代です。それにどう話すのかではなく，何を話すかがまずは重要ということを忘れてはなりません。

Q 16：現在の院生に何かアドヴァイスをいただけますか？

今ふりかえると，学生のうちにもっと研究三昧の日々を送りたかったと思います。でもそれ以外にやりたいこと，やらなければいけないこともた

くさんありますよね。要はバランスの問題かもしれません。悔いのない大学院生活を送ってください。

合研：この日本では20世紀の最後の四半世紀では，特にアジアからの留学生数が増加しています。それまでの欧米からの日本文化に関心のある留学生とは大きな違いを持つ留学生で，研究あるいは日本語習得後も日本に留まって就職したいと考えている留学生や，日本の次にはアメリカ等を目指したいと言う留学生等もいます。留学生を送る時代から，受ける時代へと日本も大きな意識変革を迫られているようですが，留学生の受け入れ態勢は，留学の実体験からこそ整えられると思われます。ブリッジ人財としての留学生を活用することは各国の国際化に貢献するのみならず，自国文化の再発見になると思われます。

河野先生貴重な御意見を有難うございました。